

2019年あたり、都市計画史を考える

東京大学大学院工学系研究科准教授 中島 直人

2019年は都市計画法制定から100年である。これまでの都市計画の歩みを振り返り、これからの都市計画を展望する好機である。ここで都市計画史研究はどのような役割を果たすことができるかと問うことは、すなわち都市計画史の課題や可能性を検討することである。拙著『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』（東京大学出版会、2018年）にて、これまでの日本における都市計画史研究の履歴、視点を整理した上で、これからの都市計画史のあるべき姿として「開かれた都市計画史」のかたちを提示した。その際、都市計画史や都市計画の研究者を中心とした専門家を対象に、厳密な方法論や分析枠組みを駆使して歴史的な事実を明らかにしていくプロフェッショナル都市計画史に加えて、制度設計や計画策定といった明確な実務的目的のもとで展開される応用的なポリシー都市計画史、都市計画の歴史的事象に対する考察を通じて都市計画の目的や価値自体

の再認識や再構築を促すクリティカル都市計画史、そして地域社会や非専門家に向けて、あるいはむしろそれらの中から発信されるパブリック都市計画史という4つの理念型があると論じた（図1）。本稿では、この分類に基づいて、都市計画史研究の今後の展望を述べていきたい。

1 プロフェッショナル都市計画史の論点

(1) 展望のための都市計画通史

プロフェッショナル都市計画史において何よりも待望されているのは、近現代日本都市計画100年を貫く新しい通史であろう。個別研究の大成としての通史は歴史分野の成熟のパラメーターと考えられるが、都市計画史分野では、石田頼房『日本近代都市計画の百年』（自治体研究社、1987年）とその改訂版『日本近現代都市計画の展開 1868 - 2003』（自治体研究社、2004年）がほぼ唯一の都市計画通史の単著となっている。2004年以降の個別研究の蓄積は大きなものがあるが、それらの成果を活かし、かつ、この15年間の都市計画の歩みも踏まえた通史が望まれる。2004年以降に展開された個別研究の中には、旧都市計画法制定時の土地利用概念や超過収容手法などについて従来とは異なる見解を明らかにした秋本福雄の一連の研究や、戦時下の新興工業都市計画の実態の解明を通じて石田による「都市計画の進歩の中断」と

の位置づけの再検討を迫る中野茂夫の一連の研究など、従来の定説に対して批判的な検証を促す成果を挙げたものがある。また、この15年間に地方都市にまで対象を広げた木方十根、浅野純一郎、今村洋一らによる戦災復興都市計画史研究や不燃化運動から初期再開発制度に至るまでの初田香成や筆者らによる戦後再開発史研究など、「戦後」の都市計画史に関する歴史的理解の深まりも来るべき通史に多大な貢献をなすはずである。

なお、石田は「2019年への都市計画史」と称した展望の章によって通史を終えている。この「2019年への都市計画史」を「2019年における都市計画史」、そして「2019年からの都市計画史」に替えて世に問う必要があるというのが現状認識であるが、その際、「今、どのような視点から都市計画の100年を通観するか」が最も大事な点となる。近代都市計画がその前提としてきた人口増と都市化圧力という社会的状況が過去のものとなった現在、展望のための通史に求められるのは、都市計画の技術・制度の展開に閉じずに、都市や環境、技術などに関する社会的認識の変容とともに都市計画を捉え直す視野である。高度経済成長期の東京の都市計画を主導した山田正男は、政府による近代化のインフラ整備を専らとした「つくる都市」の時代の都市計画から、都市空間形成を民間の積極的な投資がリードする「できる都市」の都市計画へ、という歴史観をかつて提示した。筆者は近著『都市計画学』（学芸出版社、2018年）においてこれを敷衍して、現代を多様な主体の連携に基づく持続的なマネジメントを標榜する「ともにいとなむ都市」の都市計画と位置付けたが、その基となっているのは、拡張から縮退に向かう都市動態とともに、近代化から成長、そして成熟へと向

かう100年間の社会観の変化への認識であった。しかし、さらに言えば、進行する気候変動や増大する災害リスク、AIや生命工学の先にある人間自体の疎外への懸念が、近代を支えてきた科学・技術思想の根底的な問い直しを求める中での都市計画の通史は、後述するクリティカル都市計画史としての性格を持たねばならないだろう。

なお通史のもう一つのスタイルとして、都市計画という社会技術の展開を追うというよりは、その社会技術の具体の都市、地域への適用を通史的に把握するというものがある。その代表格は、1997年に刊行された『名古屋都市計画史』（名古屋都市情報センター）であるが、その続編にあたる戦後の都市計画を扱った『名古屋都市計画史II』が2017年末に刊行されたことは特筆すべきである。

(2) グローバルな視点からの都市計画史

都市計画法100年を意識した都市計画史はどうしても日本という枠組みの中で思考されがちだが、それをグローバルな観点から再構成していくことも都市計画史研究の重要な課題である。都市計画史研究の全体像を俯瞰した初めての書籍であるカロラ・ハイン編『都市計画史ハンドブック』（Carola Hein ed. The Routledge Handbook of Planning History, Routledge, 2017）は、分野融合とともに、国境を越えたグローバルな視点の設定の重要性を説いている。欧米系の研究者の中にある従来の欧米豪中心の都市計画史からの脱却への意識がその背景にあるわけだが、日本の都市計画史研究も、しばしば欧米近代都市計画との関係を最重要視し、接点や輸入といった概念によって解釈、分析を行うことが多かった。しかし、欧米近代都市計画とは異なる型の都市計画の一つと

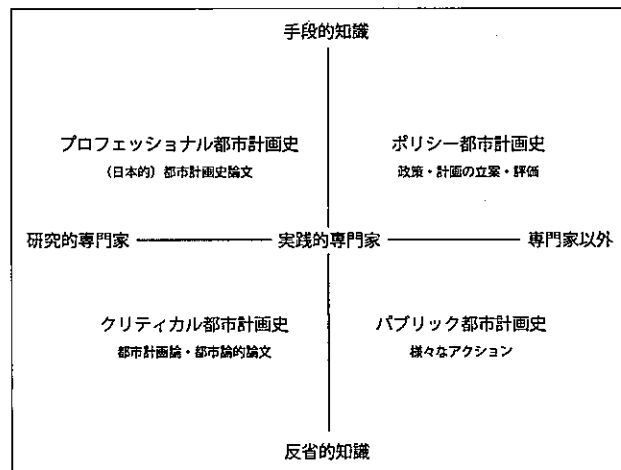


図1 都市計画史研究の4つの理念型

して日本の都市計画を素直に見つめ直し、その特質がどのような先行条件や経路に依存しているのか、他の非欧米諸国の都市計画との比較も含めた検討が要請されているのである。そして、一国の制度史としての都市計画史ではなく、知識や技術、あるいは人材や資本のグローバルな波及・伝播の歴史性を踏まえた、リージョナルな都市計画史もまた重要となってきた。

筆者らが実行委員会を担った国際

都市計画史学会横浜大会 (IPHS2018 Yokohama, 2018年7月15日 - 19日) では、大会テーマを「Looking at the World History of Planning」と設定した。67の論文発表パネル、7つのラウンドテーブル (図2) において活発な議論が展開されたが、発表者の所属機関の所在地は欧州、南北アメリカ、アジア、中東、オセアニアの28ヶ国に及んだ。秋本福雄による基調講演「Connections and Identities

of Planning History of Japan」は、日本人以外の著者による日本文化論の系譜をたどりながら「相互理解」の困難さについて言及した上で、草創期の諸外国との関係から日本の都市計画の特徴について論じ、近年の新しい世界史の潮流とレヴィ＝ストロースら文化人類学の知見に導かれながら、異文化間の「相互理解」の基礎としての世界史の可能性を講じる内容であった。日本の都市計画100年という現時点において、そうした世界史が果たすべき役割を見据えつつ、日本の都市計画史研究の蓄積自体を国外に対して開いていくこと、発信していくことが直近の課題なのである。

2 ポリシー都市計画史の論点

(1) 空間履歴としての都市計画史

2011年の東日本大震災直後、筆者らは「三陸海岸都市の都市計画／復興計画アーカイブ」を立ち上げ、三陸沿岸都市における過去の復興計画や都市計画に関する図面資料や文献資料をデジタル化し、wikiのスタイルで整理して公開した。この作業を通して、例えば昭和三陸津浪からの復興計画における「逃げる」都市づくりなど、過去の復興計画の意図に学ぶべきことがあることを確認したのと同時に、近代都市計画が土地本来の自然特性を見えなくする「覆い」のように働いてきた事例に衝撃を受けた。耕作にも適さなかった河口の低地、塩田地帯が耕地整理により沃田になり、土地区画整理事業によって宅地化され、次第に市街化し、そして、津浪に浚われた。そこでは都市計画がすでに国土の空間履歴の一つとなって、特段意識されることのない地層 (それは重層している) となっていた。それらを一枚一枚丁寧に剥がしとって確認し、都市計画以前の土地の特性とともに都市空間の時間的構造

を理解、評価することが、今後の都市計画にとって必須であることを痛感した。

このことは震災復興に限定した話ではない。むしろ、日常的な都市計画の立案における都市計画史研究の役割の一つが、空間履歴の解明、整理にあることを示唆している。例えば、都市計画史家の越澤明が策定委員長を務めた『品川区まちづくりマスタープラン』(2013年)では、まちづくりに関する課題とその原因の理解を目的として、「市街地形成のあゆみ」の節を設け、近代以前の大名屋敷の土地利用から始まり、都市計画道路の変遷、耕地整理・土地区画整理の履歴などに関するデータを整理・図化している。一次資料である都市計画図なども掲載し、現在の市街地形成の要因や経緯を明確に示し、課題への理解を深めている。

(2) 都市計画遺産のための都市計画史

都市計画史の隣接分野である建築史や土木史は、文化財保存の実務と深く結びきながら発展してきた。建造物や土木構造物の歴史的な価値付けを担ってきたのは、建築史研究や土木史研究であった。都市計画史の場合はどうであろうか。筆者らは2010年以降、「我が国の近代都市計画が現在までに生み出してきたもの、そしてその中で将来に遺していくべきものは何か」という問いを立て、都市計画遺産研究会を組織して活動してきた。その背景にある思いを研究会の趣旨文から引用すると、「都市計画の理念や制度の形成、都市計画が生み出した実空間や都市形成過程を歴史的に明らかにするという従来の問題意識を継承しつつも、現在や将来の都市づくりとの関係性を積極的に見出し、構築していくというある種の野心のもとでそれを批判的に乗り越えていくことに他ならない。また、景観法や歴史まちづくり法の制定に象徴される現代の都市保

PANEL NUMBER LIST

GUHP*: Panel Co-Sponsored by the Global Urban History Project

- | | |
|---|--|
| 1 The Genesis of Yokohama's Strategic Planning Environment: Reflecting on the Contribution of Akira Tamura and His Work | 40 Discussing the Teaching and Design of Planning History Courses / Round Table |
| 2 A Glocal Approach to Urban Design: MAKI Fumihiko, Group Form and East-West Dialogue | 41 History of Regional Planning |
| 3 Rethinking the Recovery and Resettlement After Disasters | 42 unscheduled |
| 4 Machizukuri and Participatory Planning | 43 Garden City and Modern City Planning Movement |
| 5 Public Parks in East Asia | 44 Superblock and Neighbourhood Unit |
| 6 Rethinking of Japan's Oversea Concession | 45 New Town |
| 7 Planning Community without Planners / GUHP* | 46 Planning Practice Between the Late 19th Century and the Early 20th Century |
| 8 The Global Petroleumscape in East Asia (East Asian Petroleumscape (Part 1)) / GUHP* | 47 Post World War II Planning |
| 9 At the crossroads of oil flows and international planning exchanges (East Asian Petroleumscape (Part 2)) / GUHP* | 48 Disaster and Resiliency |
| 10 Planning Modern Shanghai and Tianjin | 49 Housing Policy, Studies and Design |
| 11 Between Empires and Nations: Urban Change in Twentieth Century China and Taiwan / GUHP* | 50 Housing Typologies |
| 12 Planning History in Modern China | 51 European Planning Culture |
| 13 Foreign Influence in Planning | 52 Open Spaces in Changing Cities |
| 14 Taking possession of the history: reconstructions, allusions and simulacra for urban revival / Round Table | 53 Getting Published / Round Table |
| 15 Westernization in East Asia | 54 What Is Happening in Contemporary Cities? |
| 16 History of Urban Conservation | 55 The Japanese 1919 City Planning Act System in the World History of Planning |
| 17 Living Heritage and Local Community | 56 Urbanization and Planning Heritage |
| 18 Transportation (Railway) | 57 Western Planning in Asian Treaty Ports / GUHP* |
| 19 Planning History of Harbor Cities | 58 Planning History and Megaevents: Part 1, Planning, Design and Event Spaces / GUHP* |
| 20 The Anglo Imperial City | 59 Planning History and Megaevents: Part 2, Olympic Legacy / GUHP* |
| 21 Urban Vision and Planning Heritage | 60 Sites of Exchange: The Confluence of Global Networks and Local Interests in the Planning of Financial Centres / GUHP* |
| 22 Comparison of Urban Form Between Asian Cities | 61 Creative Port Cities: Transnational Spatial Practices and Cultural Exchange / Round Table |
| 23 Examining the scope of industrial-oriented global planning history from Asian perspective | 62 Surveys and Plans for Japan's Changing Cities: Kon Wajiro, Nishiyama Uzo and Eika Takayama |
| 24 Heritage and Urban Regeneration | 63 Diverse Planning Cultures and Traditions on the Way to a Flood Resilient City |
| 25 Adaptation and Resiliency of Socialist Planning in Transitional Economies: China, Hungary, Poland, and Russia | 64 Looking Back to Chinese Cities in Old Dynasties |
| 26 Critical Junctures of Institutional Transformation: Developing theory and cases in planning history | 65 Traditional Settlement and Native Planning Wisdom |
| 27 The Routledge Handbook of Planning History / Round Table | 66 Planning Experiences in Modern China |
| 28 Colonial Planning in Asian Cities | 67 Circulating Knowledge in the Cold War Periphery: The Architecture of Public Housing |
| 29 Transnational Planners and Engineers | 68 Planning Connections through the Iron Curtain: Phases, Themes and Impacts |
| 30 Zoning, Regulation and Guideline | 69 Shrinking Planning in the Historical Planning Context / Round Table |
| 31 Sustainable Urbanism and Environmental Planning | 70 Formation and Evolution of Cities |
| 32 Landscape Design and Nature Conservation | 71 Professor Michael Hebbert talks English-language publication for international readership: the challenge and the reward / Round Table |
| 33 Water and City | 72 The Formation of Planning Historiography Patterns in European and International Writings (19th-20th c.) |
| 34 Transformation and Management of Urban Communities | 73 Immigrants, Settlements and Informal Urbanism |
| 35 Policy, Politics and Planning | 74 Planning Concept and Urban Design Theory (1) |
| 36 Planning Heritage and Community | 75 Planning Concept and Urban Design Theory (2) |
| 37 The Global History of Urban Renewal / GUHP* | |
| 38 Historicizing the Global City / GUHP* | |
| 39 Global Cities, Urban Space, Ethnic Mobility and Intercultural Integration / GUHP* | |

図2 IPHS2018でのパネル、ラウンドテーブルのテーマ一覧

全、歴史や文化を活かしたまちづくりという文脈からは、未だに歴史や文化の対象として認識されることの少ない近代都市空間（戦後も含む）やそれを生み出した主体、理念、制度、プラン等の歴史的・文化的価値を探究していくことで、いわゆる歴史都市ではない、一般の都市における歴史や文化を活かした都市づくり、まちづくりの基盤、方法論を構築していく」ということであった。

「都市計画遺産」への着目は、日本国内に限定した話ではない。都市計画史研究の今後のありようを展望したワード、フリーストーン、シルバーによる「“新しい”都市計画史 省察、論点、方向性」(Stephen V. Ward, Robert Freestone and Christopher Silver, The “new” planning history Reflections, issues and directions, Town Planning Review, 82(3), 2011) は、「(都市計画史研究と都市計画の現代的課題や議論との接続という点で) 特筆すべき肥沃な領域は都市保全研

究にあり、文字通り、計画された空間や計画のアイコンを遺産の一種として認識することにある」としている。例えばオーストラリアでは、そうした国家的な文化遺産のカテゴリーの一つとしての可能性を前提に、都市計画遺産の全国調査が実施された。アメリカ都市計画協会が進める「アメリカの偉大な場所 (Great Places in America)」プログラムでは、文化財保護という観点からではなく、都市計画の価値を示すコミュニケーション・ツールという考えを基調として、アウトリーチの一環として、地域に対するインパクトを重視した選定や顕彰を行ってきている(表1)。

残念ながら日本においては、「都市計画遺産」が制度化に向かっていくという状況ではないが、最も積極的な都市建設活動が展開された1960年代から半世紀が経過し(登録有形文化財の登録基準には「原則、として建設後50年」とある)、更新が検討される時期を迎えた様々な戦後都市空間に対

表1 アメリカとオーストラリアにおける「都市計画遺産」選定プロジェクトの比較

	「都市計画遺産リスト」作成プロジェクト	「アメリカの偉大な場所」プログラム
実施場所、時期	豪州、2006年～2010年(出版)	米国、2007年～継続中
概要	「環境保護および生物多様性保全法」に基づく国家遺産の枠組み拡大のため、連邦環境・水・遺産・芸術省からニューサウスウェールズ大学都市未来研究所に委託した「都市計画を主題とする遺産研究」の一環として取り組まれた、都市計画遺産の評価基準の検討とリスト作成を主とするプロジェクト。	他の規範となる性格、質を有する、都市計画により生み出された場所を称揚するフラッグシッププログラム。「偉大な近隣」、「偉大な街路」、「偉大な公共空間」の3つのカテゴリーがある。
価値・位置付け	・国家遺産の枠組みの拡大 ・都市計画史研究の集大成	・都市計画の価値を示すコミュニケーションツール ・都市計画のアウトリーチ
選定数	23(暫定リスト)	290(2018年現在)
主体	・連邦環境・水・芸術省 ・ニューサウスウェールズ大学都市未来研究所	・アメリカ都市計画協会
リスト化・選定プロセス	・文献調査 ・行政担当者へのインタビュー ・専門家へのアンケート	・(主に会員からの)推薦 ・事務局による写真、文書作成 ・行政担当者へのアンケート
選定基準	主に歴史的価値の評価	主に空間特性の評価
公表形態	書籍出版	記者会見、選出イベント メディア報道
都市計画の規定性	国家の文化史の一つとしての都市計画史の物証	都市計画という人間の介入と有機的な原理や偶然の組み合わせ

して都市計画史的な関心が高まっているのは事実である。例えば、日本初のニュータウンである千里ニュータウンでは、2012年に「千里ニュータウンまちびらき50年」と題した市民・主体の記念行事が行われたが、2018年には千里ニュータウンが立地する吹田市の市立博物館と、もうすぐ入居開始から50年を迎える多摩ニュータウン内のパルテノン多摩歴史ミュージアムが連携した都市計画史を主題とした展覧会「ニュータウン誕生～千里&多摩ニュータウンの都市計画と人々～」が両方のニュータウンで開催され、多くの人を集めた。日本初の超高層ビルである霞が関ビルディング(1968年竣工)の50周年記念事業ではその建設の前提となった特定街区制度の導入(絶対高さ制限の撤廃、容積制度の導入)がクローズアップされたのも記憶に新しい。筆者自身もアーバンデザインセンター高島平のディレクターとして、2019年に地名誕生(住居表示実施)から50年を迎える、日本住宅公団による土地区画整理事業によって生み出された高島平(東京都板橋区)を対象に、50周年事業の一環として、「高島平ヘリテージ 高島平をかたちづけてきた50の都市空間」展を企画、実施した。

3 クリティカル都市計画史の論点

クリティカル都市計画史を展開する際に、都市計画の歴史的事象に対する深い理解と現代の都市計画に対する批判的な態度は両立できるのか、また、都市計画を内から実践的に推進しようとする姿勢と都市計画を外から批判的に捉えようとする姿勢とはどのように接続されるのか、が問われることになる。現時点での筆者なりの解答は、「都市計画の「技術」ではなく、それを支え、規定する「思想」に着目し、都市

計画の普遍的な産物としての「空間」ではなく、人々の存在と経験が生み出す固有の「場所」(『都市計画の思想と場所 日本近現代都市計画史ノート』)への着目ということになる。

日本の近現代都市計画100年において最も影響力を持った人物として、旧都市計画法の起草者である池田宏を別とすれば、最も多弁な都市計画家であった石川栄耀と都市計画学の確立を導いた高山英華の二名を挙げることに異論はないだろう。筆者は「都市計画家はどうかあるべきか」、「都市計画学はどうかあるべきか」という問いのもとに、この両者の都市計画思想、主に両者の代表的な都市計画論の形成過程を詳細に跡付ける研究を展開してきた。都市そのものへの理解から都市計画の本質的役割を考察した石川の議論や活動は、既存の都市計画制度や技術から都市を見る、都市に接するという都市計画家に「ありがちな姿勢」に対する批判的な力を持っている。一方で、高山の都市計画の学術的探究の経緯を明らかにすることで見えてきた、現在まで継承されている都市計画の「技術への限定性」とその限定設定の意図は、まさに限定からの開放の可能性を示唆する。つまり、都市計画法100年という時点でこそ実践されるべきクリティカルな都市計画史とは、100年物の都市計画の前提や枠組み、基礎そのものを問い直すことに他ならないのである。

一方で、都市計画の「場所」からの議論とは、個々の「場所」の生成への寄与という観点から都市計画を捉え直すことであるし、都市計画の具体の地域への現れを、地域がもともと有していた空間構造との重層的な関係や、地域の社会、経済、政治、文化的文脈のもとで捉え直すことでもある。この15年ほどの間に、都市計画のプランとその実現・未完・非実現、あるいは都市

計画と地域固有の文脈との対立という構図を越えて、例えば篠沢健太や木多道宏らによるニュータウンのプランを規定した地域固有の農村的・空間構造との共存関係の解明や、田中傑による帝都復興事業におけるバラックによる市街地形成、初田香成や石樽督和による戦災復興過程における闇市形成を対象とした土地の権利と物的組成との詳細な対応関係の分析などを通じて、市街地形成における都市計画の役割がより多義的、あるいは相対的に認識されるようになってきている。例えば筆者も、藤沢市駅前の再開発街区を対象とした、近世以来の都市軸との関係や再開発前の土地所有者たちの連続性、都市スケールの総合都市計画と個別敷地の再開発との関係性、そして、再開発後の地域住民たちの記憶の蓄積等の分析を通じて、再開発の持つ文脈的構造を指摘してきた。また先にも言及した東京郊外の土地区画整理事業による新規住宅地である高島平を対象に、区画整理以前の農村の空間・社会構造がその後の新規住宅地の

形成を規定していく様子に着目して、研究を進めている(図3)。こうした研究から見えてくるのは、都市計画や都市開発では消し去ることのできない地域文脈の存在であるが、それは都市計画史を一時点(できごと)の連なりとしてではなく、継続する時間軸を持つ事象として意識する契機を提供してくれる。

4 パブリック都市計画史の論点

パブリック都市計画史は未開拓の領域として設定したものである。しかし、都市計画と社会との関わりをどのようにつくっていくかという問いと深く関係しており、決して新しい問題系ということではない。都市計画史研究者自身が都市計画史研究の成果をプレゼンテーションする技術の開発や非専門家とコミュニケーションする場のデザイン実践を展開するという以外にも、様々な都市や地域でのまちづくり組織やまちづくり人自身による活動の歴史的整理状況、

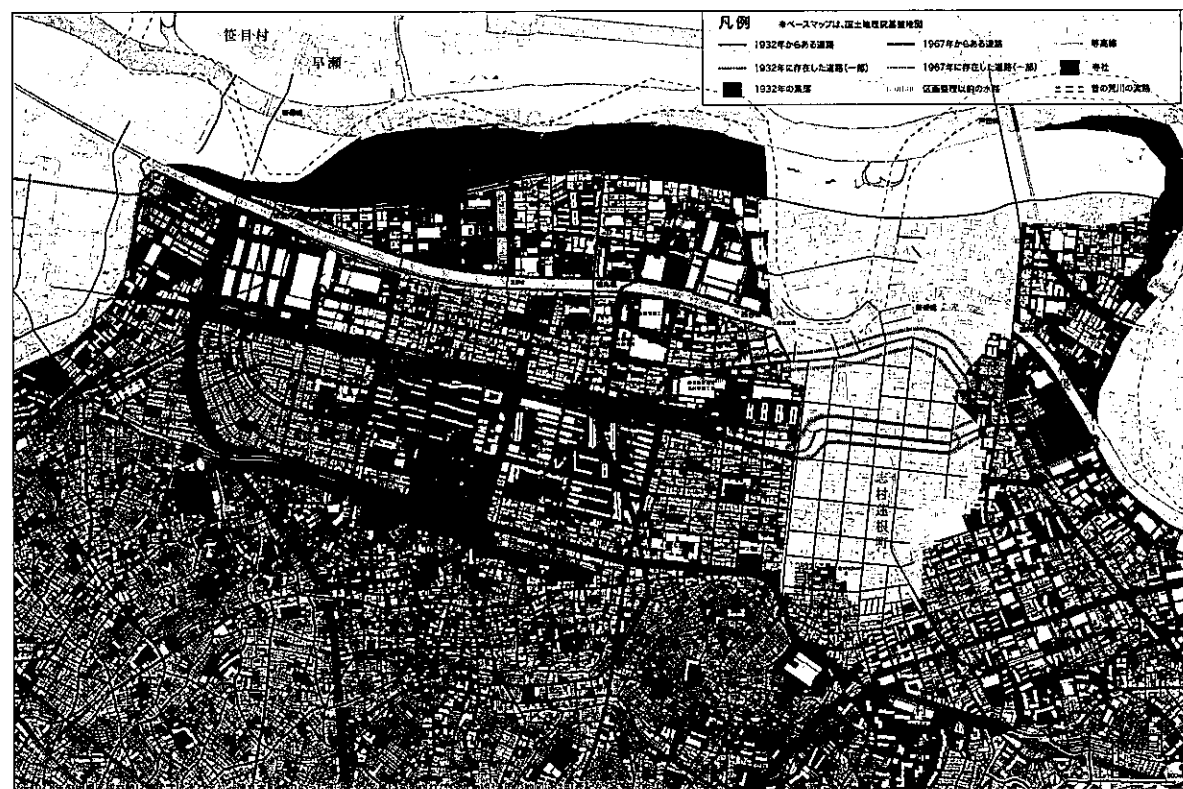


図3 高島平の土地区画整理事業以前の地域文脈

あるいは都市計画から社会への積極的なアプローチ(例えば都市計画展覧会)の歴史などに基づく考察も含むものである。例えば、中島伸らが城南住宅組合とともに取り組んでいる、組合自身が保管していた1924年の組合設立以来の活動資料に基づく住環境形成・維持に関する歴史的研究は、まちづくりやコミュニティ・アーカイブと都市計画史の接続を図る興味深い研究である。

筆者はパブリック都市計画史の実践として、2018年9月15日から23日にかけて、「アーバニズム・プレイス展2018 都市計画の過去と未来の創庫」を企画、実施した。都市計画新法制定50年、旧法制定100年を記念した日本都市計画学会の取り組みの一環である。新宿西口の超高層ビル街の入り口にあたる新宿三井ビルディングの足元のサンクン広場である55HIROBA(特定街区制度に基づく有効空地)とそれを見下ろすブリッジ、さらにビル2階のロビースペースを会場としたこの展示は、都市計画がこれまでどのような場をつくり、これからどのような場をつくらなければならないかを人々に伝える目的とした。都市計画が創り出した広場を体感しながら理解できる、開かれた展示の場、人々と都市計画のインタラクティブな記憶・展望空間というコンセプトのもと、広場として日常使いを損なうことなく、むしろ現在の日常の中に、都市計画史の情報を自然なかたちで織り込んでいくことを試みた。展示は、普段から広場に設置されている40個のテーブルを使って日本の都市計画が生み出してきた広場を一つ一つ紹介した「Great Public Places since 1919」、ビル2階ロビーのラウンジエリアのカウンター型の長机の形状をそのまま活かし、新宿における広場創成の歴史と55HIROBA自体の設計意図や経緯を年表式で紹介した「Shinjuku Public

Place Chronicle」、普段は人通りの多くないブリッジ上の使い方を変革するかたちで、各地で実際に使われているプレイスメイキング・キットの実物とパネルを展示した「Place Making Exhibition」で構成した。さらに会期中には広場を巡るトークイベントを4回、55HIROBAで実施した。雨中の夕方には、この広場の特徴であるブリッジの下に人が集まって議論を展開する熱気のある光景が生まれ、晴天の日中には、必ずしもトークを聞きにきたわけではない一般の広場利用者の方もカジュアルにトークに耳を傾ける光景が見られるなど、この企画自体が広場を生み出すことになった。つまり、都市計画史が場をデザインしたのである(図4)。



図4 アーバニズム・プレイス展2018の会場風景 (撮影:アーバニズム・プレイス展企画メンバー)

以上、2019年にあたって、都市計画史の課題や可能性について、筆者自身の経験や活動を念頭に置きながら、検討を加えた。基礎なき応用は危険である。都市計画史の役割は、都市計画が現代、将来の様々な課題に対処するための基礎を提供することに他ならない。しかし一方で、都市計画史自身も応用学としての性格を持ちうるし、積極的にそのような都市計画史の姿を構想し、実践すべきである。本稿では、あえて後者の点を強調して論じてみたのである。